

箱崎 54

— 箱崎遺跡第72次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1344集

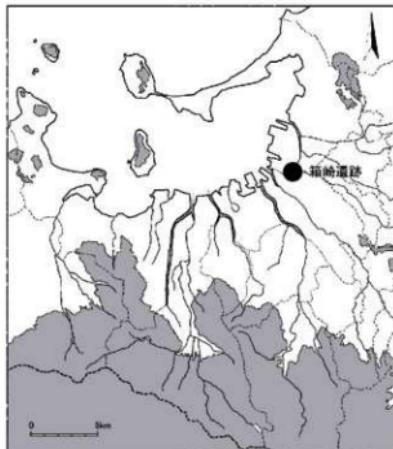
2018

福岡市教育委員会

HAKO ZAKI
箱崎 54

— 箱崎遺跡第72次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1344集



遺跡略号 HKZ-72
調査番号 1442

2018

福岡市教育委員会

序

福岡市には北方に広がる玄界灘の海を介し、大陸と人、物、文化の交流を絶え間なく続けてきた歴史があります。この地の利を活かした人々の生活を物語る多くの遺構、遺物は地中に残され、調査が進むにつれて明らかにされてきています。その中には、大陸の先進技術、文化を示す貴重なものが多く、学術研究上においても重要視されているところです。

本調査では中世の国際貿易都市として栄えた博多と並ぶ箱崎の様相を知ることができる遺構、遺物が数多く発見されました。特に、今回の調査によって13世紀初頭頃の大きな溝が直線的に延びることが判り、都市の形成や構造を考える上で貴重な資料となりました。

本書はこうした調査成果を収めたもので、やむなく多様な開発で消滅する埋蔵文化財を将来に残していく記録保存の一つです。研究資料とともに埋蔵文化財に対するご理解と活用への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行に至るまで関係者の皆様のご理解とご協力を賜りましたことに対し、厚くお礼申し上げます。

平成30年3月26日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

例 言

1. 本書は福岡市教育委員会が平成26年度に共同住宅建設に伴い、福岡市東区箱崎1丁目2051番4、2053番2、2054番1、2054番12、2054番13、2054番14地内で実施した箱崎遺跡第72次調査報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は民間受託事業として実施した。
3. 調査は荒牧宏行が担当し、遺構実測図は荒牧の他、藤野雅基が作成した。
4. 本書に掲載した遺構、遺物写真は荒牧が撮影した。
5. 本書に掲載した遺物実測図は、荒牧、浄書は樋口久美子、荒牧が行った。
6. 本文は荒牧が執筆した。
7. 本書掲載の実測図、写真、遺物のはか調査で得られた総ての資料類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管され、活用されていく予定である。

凡 例

1. 本書に用いた方位・座標は世界測地系による。
2. 掲載した遺物の番号は土器、石器等に分けて通し番号とした。
3. 遺構の種類を示す略号として掘立柱建物跡をSB、竪穴住居跡をSC、土壙をSK、溝をSD、柱穴をSP、性格不明のものをSXとした。
4. 報文中の輸入陶磁器の説明には『太宰府条坊跡X V』太宰府市の文化財 第49集 2000 太宰府市教育委員会、土器の説明には山本信夫・山村信榮「中世食器の地域性〔10〕九州・南西諸島」国立歴史民俗博物館研究報告第71集 1997、瓦の説明には『太宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』九州歴史資料館 2000の編年・分類を用いた。

調査基本情報一覧

| | | | | | |
|-------|--|---------|-------------------|------|-------------------|
| 遺跡名 | 箱崎遺跡 | 調査次数 | 72次 | 調査略号 | HKZ-72 |
| 調査番号 | 1442 | 分布地図福番号 | 34 | 遺跡番号 | 2639 |
| 申請地面積 | 406m ² | 調査対象面積 | 239m ² | 調査面積 | 167m ² |
| 調査期間 | 平成27(2015)年1月20日～平成27年5月22日 | 事前審査番号 | 26-2-497 | | |
| 調査地 | 福岡市東区箱崎1丁目2051番4、2053番2、2054番1、2054番12、2054番13、2054番14 | | | | |

I はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市教育委員会は同市東区箱崎1丁目2051番4、2053番2、2054番1、2054番12、2054番13、2054番14における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成26年9月9日付で受理した。これを受け文化財部埋蔵文化財審査課は申請地が周知の埋蔵文化財包蔵地である箱崎遺跡に含まれることから確認調査を同年11月6日に実施した。確認調査では現地表面下20~55cmの第1面と60から120cmの第2面で遺構面が確認されたことから遺構の保全等について申請者と協議を行った。その結果、埋蔵文化財への影響が回避できないことから建物部分について記録保存のための発掘調査を実施することで合意し、平成27年1月13日付で株式会社岡部商会を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託を締結した。統いてこの契約に従い発掘調査を同年1月20日から5月22日まで実施し、平成28年度、29年度に資料整理および報告書作成を行うことになった。

2. 調査の組織

平成26年度の発掘調査、および28年度、29年度の資料整理、報告を以下の組織体制で行った。

【調査主体】 福岡市教育委員会

(平成26年度 発掘調査)

【調査総括】 経済観光文化局 文化財部埋蔵文化財調査課 課長 常松幹雄

同課調査第2係長 櫻本義嗣

【庶務】 埋蔵文化財審査課 管理係長 内山広司 管理係 川村啓子

【事前審査】 埋蔵文化財審査課 事前審査係長 佐藤一郎 主任文化財主事 池田祐司
文化財主事 板倉有大

【調査担当】 埋蔵文化財調査課 主任文化財主事 荒牧宏行

(平成28年度、29年度 整理・報告)

【整理・報告総括】 経済観光文化局 文化財部埋蔵文化財課 課長 常松幹雄

同課調査第2係長 加藤隆也（28年度）、大塚紀宣（29年度）

【庶務】 埋蔵文化財課管理係長 大塚紀宣（28年度） 管理係 入江よう子（28年度）
文化財保護課管理調整係 松尾智仁（29年度）

【事前審査】 埋蔵文化財課 事前審査係長 佐藤一郎（28年度） 本田浩二郎（29年度）
主任文化財主事 池田祐司 文化財主事 吉田大輔

【整理・報告担当】 埋蔵文化財課 主任文化財主事 荒牧宏行

II 位置と環境

1. 地形

箱崎遺跡は博多湾に面した砂丘上に立地する。周辺には同じく、砂丘上に博多遺跡群、吉塚本町遺跡、堅粕遺跡等が立地し、浜堤列が形成されていたことを示す。

箱崎遺跡の範囲は南北1050m、東西550mに及ぶ。西側には中世の海岸線近くとみられる元寇防壁は筥崎宮の本殿から西側に460m離れ、東側は宇美川で画され、さらにラグーンが広がる。

砂丘の頂部は筥崎宮周辺にみられ、砂丘列の尾根が現在の大学通りに沿って延びる。調査地点は筥崎宮の北東部に位置し、砂丘は北東方向に傾斜しているものとみられる。

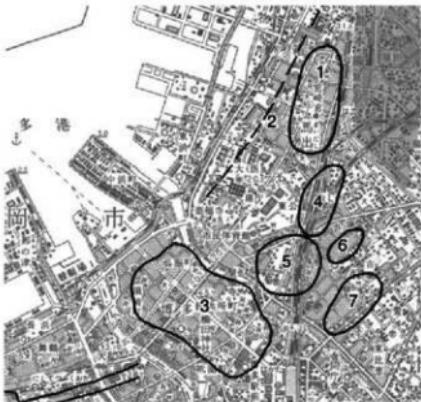


Fig.1 箱崎遺跡位置図 (1/25,000)

2. 既往の調査成果から

遺跡の時期としては弥生早期の夜白期に遡る可能性があるが、遺構は知られていない。古墳後期以降には蛸壺等の漁具の出土をみる。本調査では弥生終末から古墳初頭の遺物が出土し、当該時期の集落が展開しているとみられる。遺構、遺物が増加するのは筥崎宮が創建された10世紀以降である。箱崎宮の北側に10世紀代とみられる遺物を散見するが、遺構の構成等は把握できていない。10~11世紀代の瓦当を含む瓦片は筥崎宮を中心に北東部や南側で出土している。大宰府出土と同じ型式の瓦当片は大宰府との結びつきを示している。今後、遺構が少ないと考えられる筥崎宮や神宮寺の範囲も含め検討していく必要がある。

11世紀後半以降は、博多同様に遺構、遺物等が急激に増加し、活発な貿易が行われ始めたことを示す。輸入陶磁器等は14世紀初頭頃までの時期をみる。また、12世紀代の中国系の瓦当も上記の大宰府系の瓦当と同じく筥崎宮の北東部や南側から出土している。

15世紀以降は筥崎宮周辺においては、この中世包含層の上面で検出される。浅く遺構、遺物が検出され、上部が後世に削平され整地されていることを示す。既往の一部の調査では中世包含層を除去したことから特に15世紀以降を失っている。遺構の層位や井戸の配置等から15世紀前後に土地の改変が行われた可能性がある。

3. 文献から

箱崎遺跡の発展の契機となった筥崎宮は「筥崎宮縁起」によれば延長元年（923）に穂波郡大分官から遷座したという。また、承平七年（937）の大宰府牒によれば筥崎宮に併置されていたとみられる筥崎神宮寺に多宝塔を造立するよう申達しているのでこの時期までには筥崎宮と神宮寺は創建されていたことが知られる。筥崎宮に遷座した理由としては新羅入寇の危機感と大宰府官人の日中貿易への私



Fig.2 調査地点位置図 (1/5,000)

的な関心によるところが大きいといわれる。大陸に対して最先端に位置した博多湾沿岸に鴻臚館、博多、香椎宮とならび防衛と貿易の拠点を配置させるというものである。創建理由の後者については、筥崎宮大官司が大宰府官の泰氏といわれ大宰府と筥崎宮が密接に結びついていたことが関連している。「今昔物語集」26-16、「宇治拾遺物語」180ではその大宰府官人の泰貞重が私的に宋人の貿易商人と取引し、中央の権勢に贈り物を行う姿が如実に描かれている。

その後、筥崎宮は11世紀半ばに宇佐弥勒寺の別宮、12世紀後半に石清水八幡宮の別宮となり、博多とともに社寺貿易の中心となっている。室町期になると新安沖沈没船から出土した荷札に博多承天寺の塔頭「釣寂庵」、「筥崎」と書かれていたことや博多商人の奥堂氏が筥崎宮油座の神人であり、貿易商人でもあったことなど、引き続き博多と密接な関係を保ち貿易を推し進めていたことが判る。

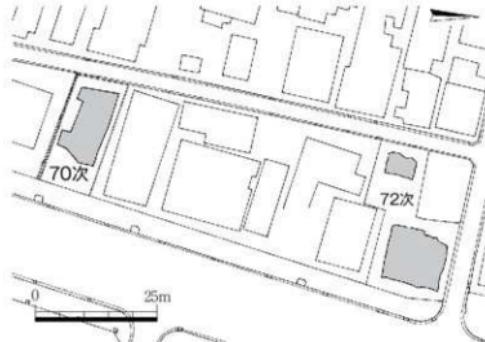


Fig.3 調査範囲図 (1/1,000)



Fig.4 調査範囲図 (1/300)

III 調査の記録

1. 調査の方法

(1) 区の設定

調査範囲は鍵形の敷地に予定された西側の立体駐車場と東側の建物部分である。先ず、西側の立体駐車場部分から調査を開始し、1区とした。次に建物部分の調査にかかり、この範囲を2区とした。2区は廃土処理を敷地内で行うために、南北に分割し、南側から調査を始めた。

(2) 遺構面の設定

遺構面は次項で詳細を説明するが、3面で行った。ただし、1区では第2面から第3面の層厚が薄く、第3面から検出された遺構はほとんど無い。

2. 基本層序

現地表面のレベルは標高4.0m前後である。地山の砂丘砂のレベルは1区の西側で標高2.95m、2区の東側で標高3.25mを測り、西側へわずかに下降している。

基本層序は先ず、上層から、クラッシャーや客土による現代の整地土が30~40cm堆積する。その下層に柱穴や粘土を貼った土壤が検出され、中世の検出面（第1面）とした。この第1面から下層の明褐色砂の第2面までは40~60cmの層厚があり、下降していく2区西側から1区にかけては、グライ化した暗灰色ないし黒色砂質土が堆積する。逆に2区東側にかけては褐色砂質土が堆積する。

第2面の明褐色砂の検出面からは遺構が明確に識別できるようになる。この層は地山の風成砂丘砂である明黄色砂（第3面）の上部が汚染された漸移層の状況を示す。第2面から第3面の層厚は10~20cmで、トラック状の細かい互層がみられる。

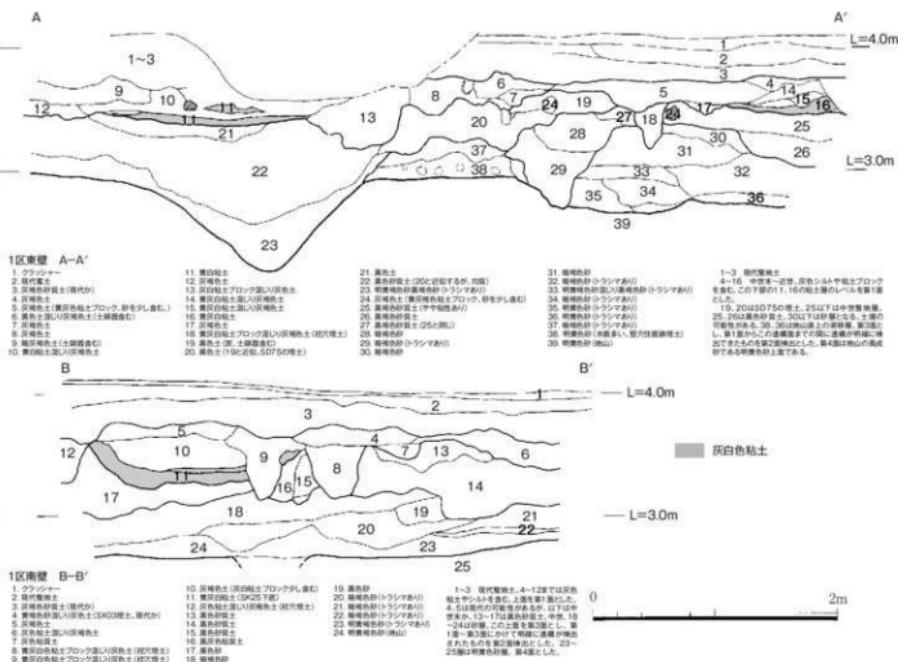
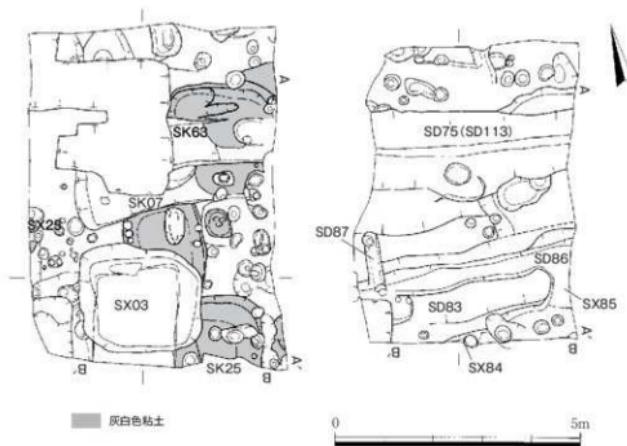


Fig.5 1区構造配置図 (1/100)、1区土層図 (1/40)

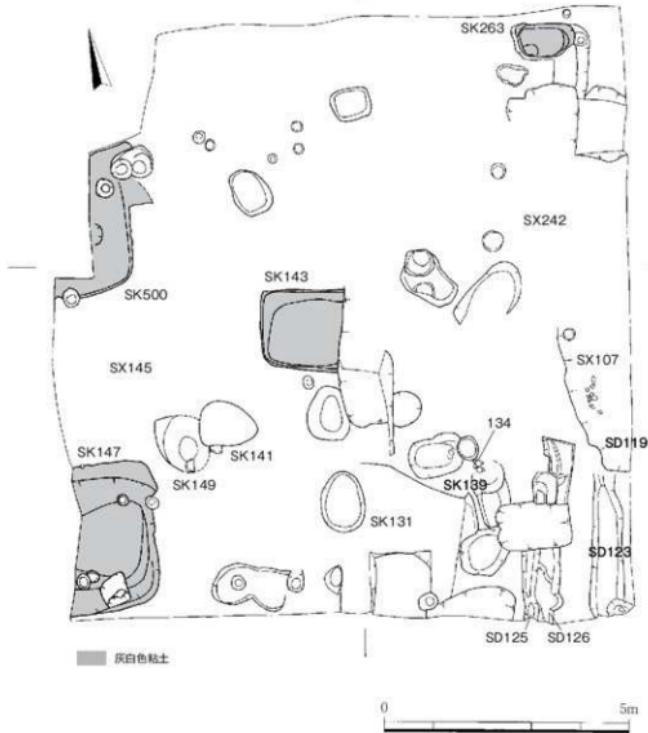


Fig. 6 2区第1、2面遺構配置図 (1/100)

周辺においてもこのように、第1面から第2面にかけて中世の包含層（整地層）が厚く堆積しているが、既往の調査ではこの部分を重機により除去したため、遺構や遺物を失った事例がある。

3. 遺構と遺物

(1) 第1面

第1面では灰白色粘土を全面に貼った隅丸方形プランの土壤が1区で3基、2区で4基検出した。主軸方位は全部ほぼ同じ方向のN-14°-E示し、現代まで続く町割りの方位をとる。

出土遺物はほとんど無く、時期を決めるのが困難である。しかし、周辺の70次調査の事例から15世紀以降の中世後半期の可能性がある。また、層位からも1区第1面から出土した88の土師質の火舎が近い時期と考えられる。

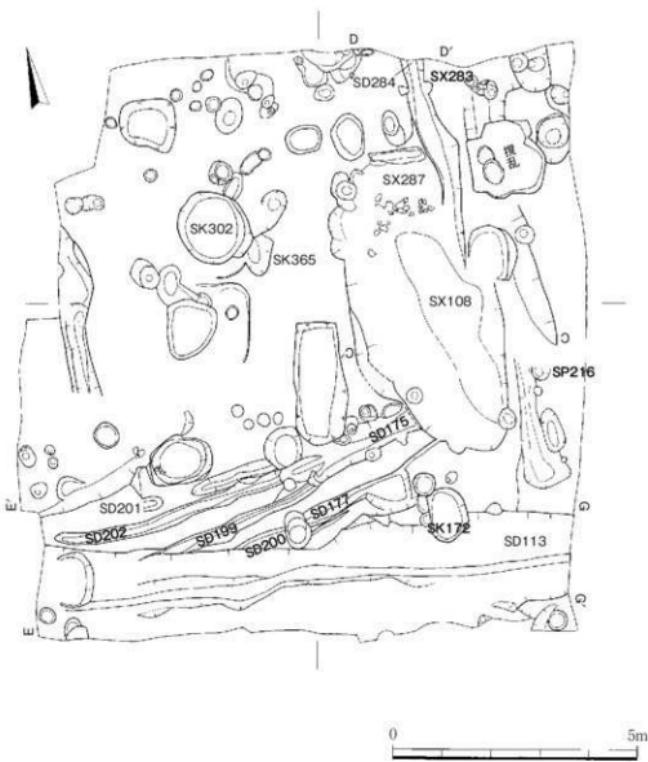


Fig. 7 2区第3面遺構配置図 (1/100)

(1-1) 灰白色粘土を貼った土壤

SK07

1区中央で検出された。南側は現代のSK03に切られ消滅しているが、北側は攪乱で壊れながらも側壁の立ち上がりが残る。幅は150~167cmを測り、深さは検出面から下底の粘土までが15cmである。灰白色粘土は全面に5~7cm厚みで貼られている。底面は平坦で、側壁は斜めに立ち上がる。

SK25

1区南東隅で検出された。大半が調査区外となるため、規模は不明であるが、東西の粘土内側で180cmを測る。全面に貼られた灰白色の粘土は波打ち、厚いところで約15cmを測る。底面の粘土上面までの深さは25cmである。

SK63

1区中央部の東側で検出された。中央が試掘トレンチで壊されているが、東西長はおよそ215cmを測る。南北長は試掘トレンチ以南で検出された灰白色粘土が同一遺構であるか不明確であるが、含めた長さは240cmとなる。粘土の厚みは5cm以下で薄く、底面の粘土までの深さは7cm程度である。

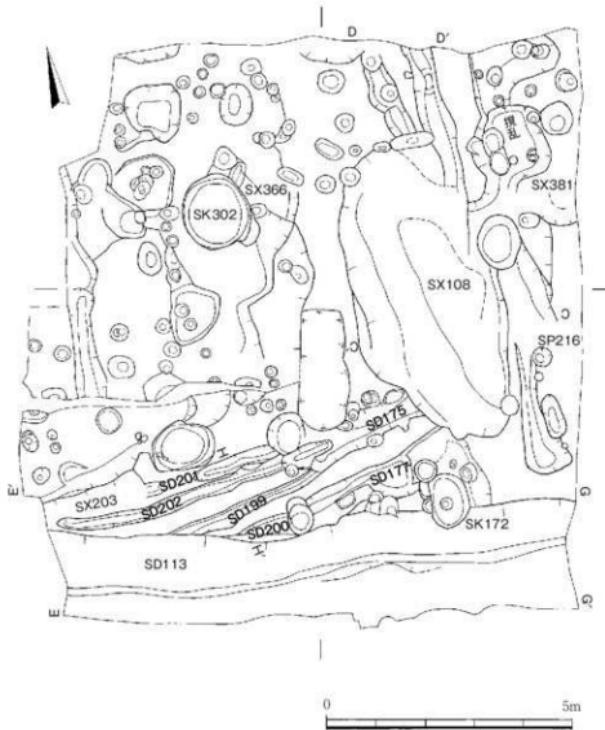


Fig.8 2区第4面遺構配置図 (1/100)

(2区)

SK143

2区中央部で検出された。東側が試掘トレンチで消滅している。現状で、南北長165cm、東西長は170cm以上の方形プランを呈す。検出面から下底粘土までの深さは9cm程度である。粘土は5~15cm程度まで貼られ、側壁際が厚くなり、下底との境が緩やかとなっている。

SK147

2区南西隅で検出された。南北長300cm、中央の下底粘土までの深さ17cmを測る。粘土は淡黄灰色を呈し、厚みは10cm程度で全面に貼られている。壁面の立ち上がりは粘土上面、下面の掘方ともに緩やかな傾斜である。

SK263

2区北東隅で検出された。上部は別遺構で消滅していたが、下部の淡黄灰色粘土が鍵状に検出された。さらにその下部で東西長125cm、南北長70cmの打円形プランのSK249が検出された。SK249は深さ20cmを測り、埋土も粘土で充填していた。

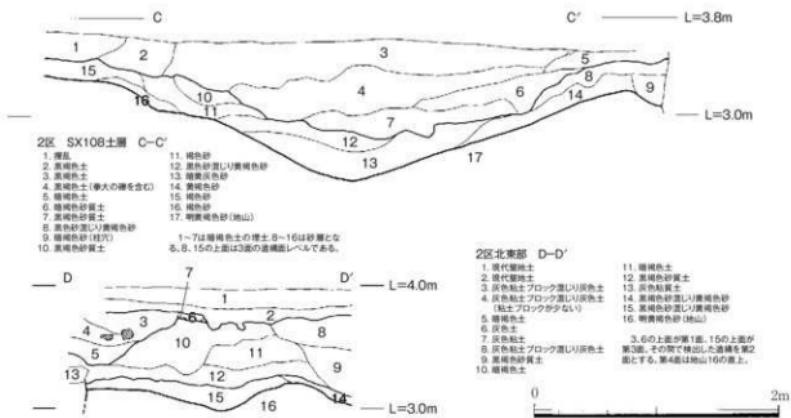


Fig.9 2区土層図 (1/40)

SK500

3区北西隅で検出された。南北長300cm以上を測る。淡黄灰色粘土の壁面の立ち上がりは削平され、平坦な粘土面が遺存する。粘土は中央にかけて厚く堆積し、厚みは4~9cmを測る。粘土下の掘方が舟底状に緩やかな傾斜となっている。

(1-2) 土壌等

SX108 (242)

2区第1面の東側で検出された。上部に切りあう土壤や礫が集中する部分があり、第2面で形状が明確となった。短径3.9m、長径6.5mの楕円形プランを呈す。断面は緩い傾斜のV字形をなし、第1面から中央の最深部までの深さは67cmを測る。

出土遺物 (75~80)

75は黒色土器B類(内黒)である。XⅠ期頃とみられ、古い遺物の混入である。76は瓦質の摺鉢、77は土師質の火舎、78は土師質の片口である。内外面に細かいハケメが残り、内面下半部は磨耗している。明褐色を呈し焼成は硬質である。79は青磁皿である。底部の内外面に各3箇所目跡が残る。80は細い鍋運びの青磁碗である。出土遺物の下限の時期は14世紀前半頃か。

SK131

2区中央南側で検出された。長径125cm、短径94cmの楕円形プランを呈す。深さは75cmを測る。上層に暗灰褐色砂質土、下層に黒色(炭化物か)砂質土を含む層がレンズ状に堆積し、完形に近い土師器皿、坏を発見している。

出土遺物 (47~49)

47は土師皿、48、49は土師器坏である。いずれも完形である。底部は糸切り底で、49には板目が残る。時期は明確ではないが、XⅦ期(13世紀後半)前後と思われる。

SK134

2区中央部で検出された。掘方は明確に判別できなかったが、土師器皿4個、坏2個(64~69)が埋置されていた。掘方のSK139からは遺物50~53が出土した。(P18~19遺物説明)

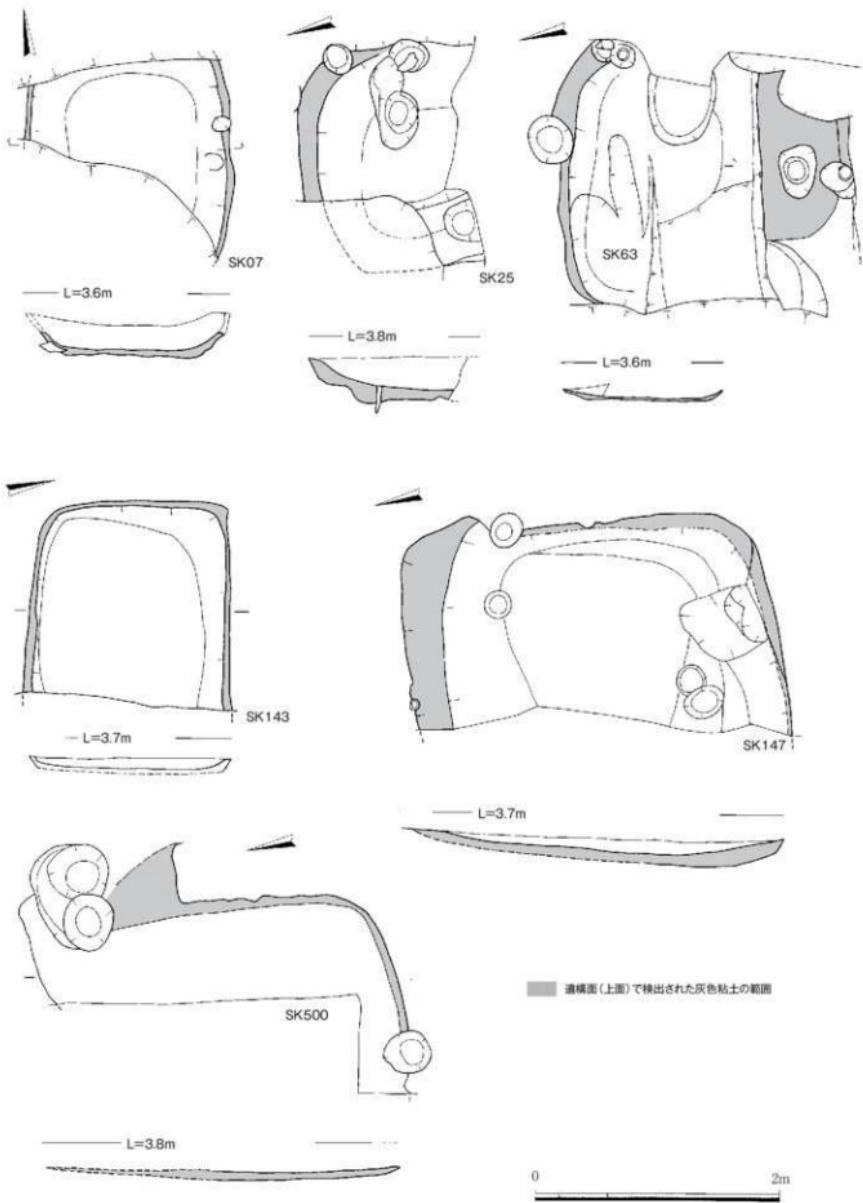


Fig. 10 第1面検出土壙 (1/40)

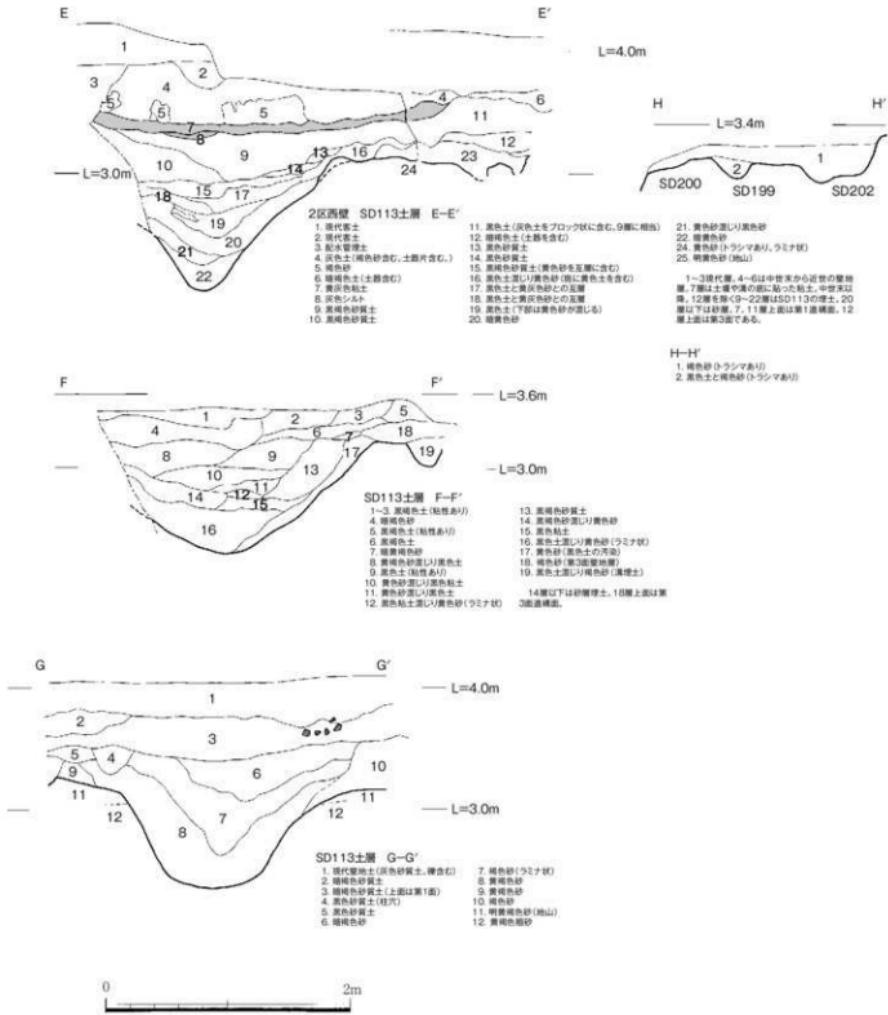


Fig.11 SD113土層図 (1/40)

SK141

2区西側で検出された。人骨が出土したSX149を切る。長径138cm、短径90cmの楕円形プランを呈す。深さは56cmを測る。

出土遺物 (53)

土器師坏53は口径11.6cmを測り、底部は糸切りで板目は付かない。中央部に内面から打ち抜いた穿孔を有する。XⅦ期（13世紀後半）前後か。

(1-3) 溝

SD75 (SD113)

1区中央で検出された大溝のSD75は2区のSD113に直線的に延長し、その距離26mが検出された。延長方向はN-81°-Wを示し、現在の町割より5°程度、西側に振れる。

1区西側の土層観察から3層より下層の第1面黒灰色土から掘りこまれているのが判る。上部には既述の淡黄灰色粘土の遺構が切っている。第1面からの深さは160cmを測る。断面形は第2面（褐色砂）以下約100cmでは断面V字状

となり、幅2.5mを測る。その上部は波打つように起伏が大きく広がりながら第1面上部にまで達す。

埋土は下底に深さ約40cmまで砂層が堆積し、壁が崩壊しながら堆積したこと示す。その上層には黒色砂質土が堆積し、緩やかなレンズ状の層界が明瞭である。従って、この形状で存続し、緩やかに埋没した可能性がある。

2区で検出された延長のSD113も1区SD75とはほぼ同様の形状であるが、2区東際の土層断面のように下底が丸くなっている部分もみられる。下底のレベルは1区の西際で2.14m、2区の東際で標高2.34mを測り、先述（2. 基本層序）したように地山の砂丘砂の傾斜同様に西側へわずかに下降している。
出土遺物（1～8、13～27）

1は土師皿、2は土師器の高台付皿である。3は土師器碗、4は土師質の足鍋、5は瓦器碗である。6は龍泉窯系の青磁碗である。外面下半は露胎。内底は輪状に軸を搔き取る。内面には櫛歯による草花文が施されている。大宰府の分類には含まれない。7の陶器鉢は大宰府分類の鉢III-1に該当する。外面の上半部のみ施釉している。13～15は土師器壺である。糸切り底に13は板目が無く、15には細かい平行の板目がつく。16は土師器小壺、17の黒色土器外底には細いヘラ記号が刻まれている。18は土師器碗、19の白磁皿は薄く、青白磁に近い発色である。外底は露胎である。20の白磁碗は大宰府分類のIII-1に該当する。外底の下半部は露胎、内底は輪状に軸を搔き取る。21は龍泉窯系青磁皿のI-1c類である。外底は露胎で暗褐色を呈す。22は龍泉窯系の青磁皿I-2d類である。外底は21同様に露胎で暗褐色を呈す。23は須賀質の壺である。外面は小さな格子タタキがヨコナデによって消されている。24の陶器壺鉢は大宰府分類II-1aに近いが、口縁部の内側への張り出しが強く、外面口縁部の下部が垂れ下がらない。壺目も細かく11本位など古相を示している。25は石鍋、26は中国系の押文を施した平瓦瓦当である。27は器台の脚部と考えられる。灰白色を呈し、縦に5面の面取りがみられる。

遺物の時期は概ね12世紀後半から13世紀初頭頃に収まると考えられるが、5の瓦器碗、24の陶器壺鉢、25の石鍋が13世紀前半まで降る可能性がある。

SD123

2区東際でSD113を切って南北に走行するが、北側をSD119に切られている。幅60cm、深さ24cmを測る。

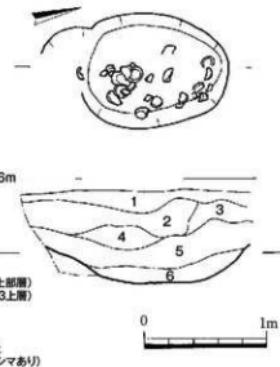


Fig. 12 SK131実測図 (1/40)

SD125、126

2区東際で検出された。SD123の方向より若干東に振れる。深さは15~20cmを測り、2条以上が切りあっているとみられるが、形状が崩れている。

SD119 (215)

2区東際で検出された。SD123を切って湾曲しながら延長するが、SX108と切り合い、形状が判別できなかった。方向から2面北側のSD284に延長する可能性があり、その場合、SX108を切っている。

出土遺物 (28~32)

28は糸切り底の土師器皿、29、30の土師器碗はXⅠ期、31

は淡黄白色に鉄絵を描いた盤である。外面底部近くの体部から底部にかけて露胎である。32の丸瓦外面には複線斜格子文のタキが施されている。出土遺物の時期は28が降るので11世紀後半以降とみられる。

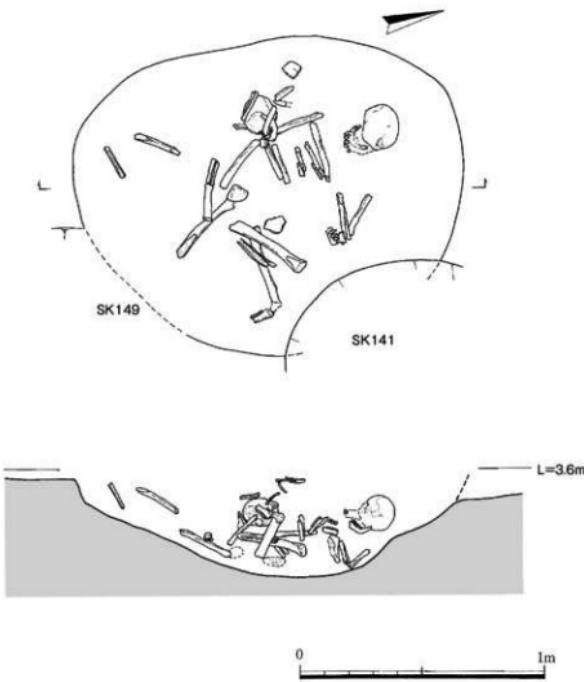


Fig. 13 SX149人骨実測図 (1/20)

(2) 第2面

(2-1) 溝

SD86

1区第2面、中央から南側にかけて東西に走行する溝が少し方向を違えて3条以上検出された。2区で検出されたSD200~203等に延長していく可能性がある。

SD86はN-88°-W方向に砂で崩壊した上端ラインに入出しがみられるが、幅65~83cm、延長4.5mが検出された。深さ34cmを測り、下底に比高差はほとんど無く、調査区内で西側に3cm下がる程度である。西際は南北に走行するSD87に切られている。東際では壁面の土層観察からSX85を切っている。また、北側の上端は堅穴住居跡の可能性があるSX107と切り合い不明瞭となっている。

出土遺物 (9~12)

9、10は蛸殻、11は土錘、12は平瓦片である。

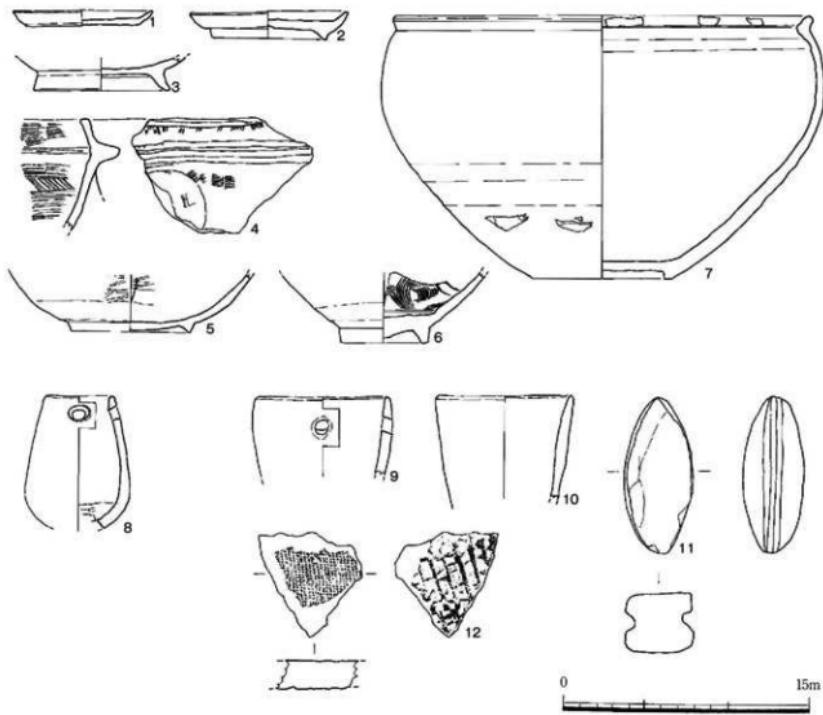


Fig.14 出土遺物実測図1 (1/3)

SD83

1区第2面のSD86南側で、それとほぼ平行した落ちが検出された。下端は不明。

SD84

1区第2面の南際で検出された。深さは5~9cmを測る。柱列が重なる。

SD87

1区のSD86に直交し、切っている。また、SD75には切られていることからSD86→SD87→SD75の掘削時期が考えられる。

SD203, 201, 175, 202, 199, 200, 177

2区第2面で検出された。幅20~30cm、深さ5~15cm程度の小溝が平行し、西側はSD113に、東側はSX108に切られている。延長は少し湾曲し、1区のSD86等に統く可能性がある。

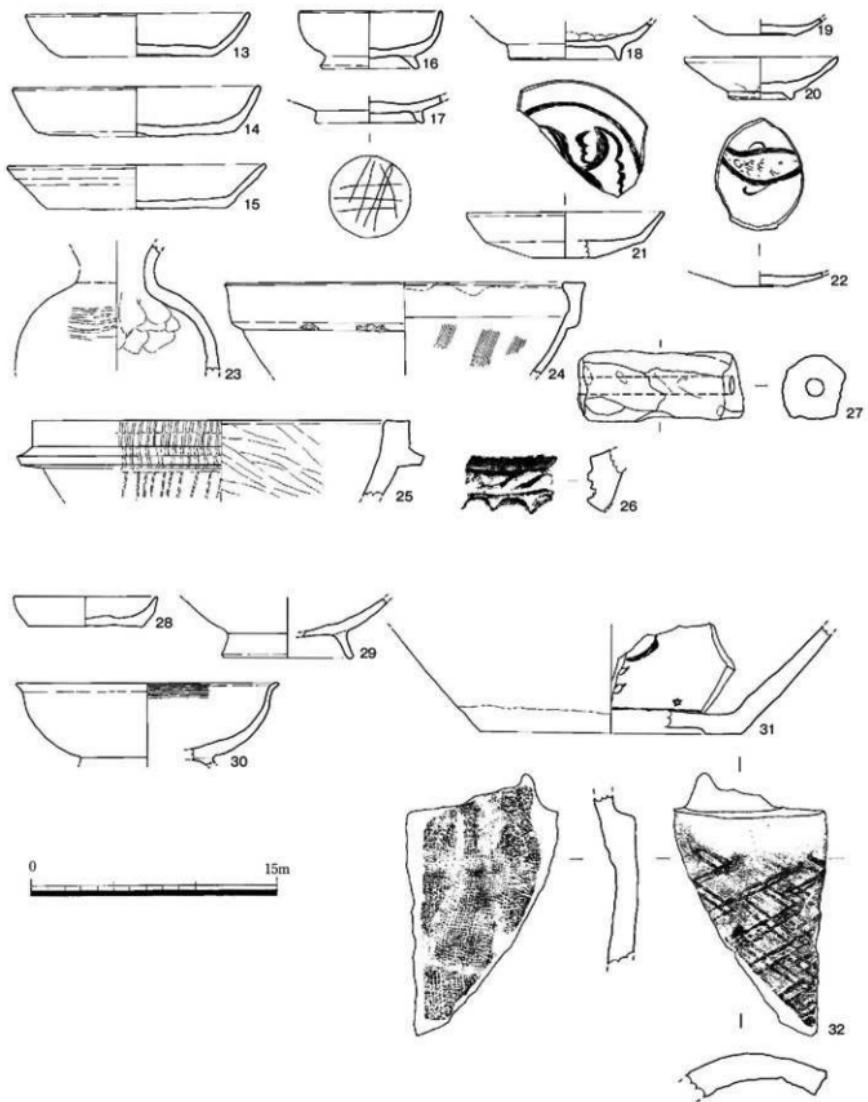


Fig.15 出土遺物実測図 2 (1/3)

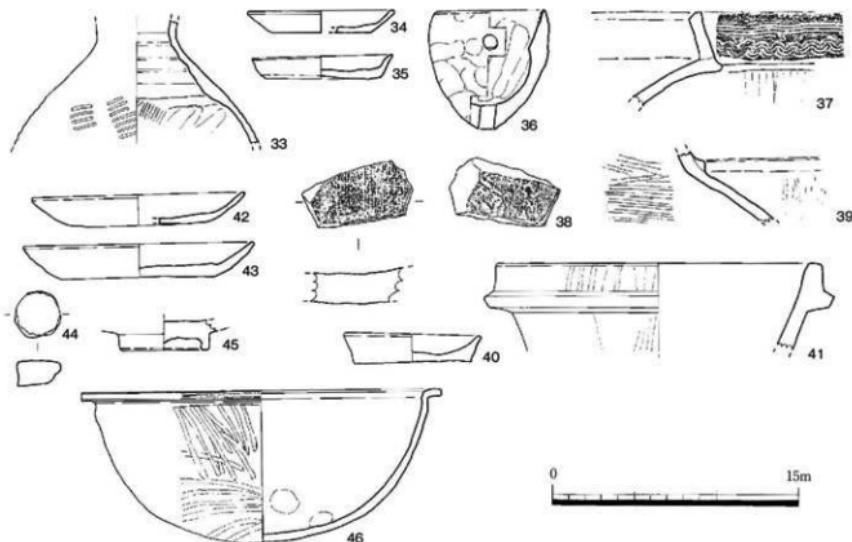


Fig.16 出土遺物実測図3 (1/3)

(2-2) 土壌・その他

SX107

1区西側で検出された。SD75、SD86に切られ一部であるが、堅穴住居跡の可能性がある。炉とみられる焼土壙が検出された。

SX302

3区西側で検出された。長径155cm、短径130cmの楕円形プランを呈す。深さは117cmを測る。下底より17cm上部より埋土が砂となる。

SK149

2区西側で検出された。長径158cm、短径128cmの楕円形プランの土壙に上腕骨の数から3体以上の人骨が棄てられたような状態で出土した。

土壙は摺鉢状に掘られ、最深部までは40cmを測る。まず、最初に骨の位置関係があり乱れていないう人骨1が埋められている。おそらく、四肢が繋がった状態であったと考えられる。脛より下の骨が欠失しているのは後世の削平による可能性がある。

次に側面図からも明らかなように人骨2が遺棄されている。大まかには屈葬の姿勢が復元できる。しかし、右上腕骨と右の肘より先の骨（とう骨、尺骨）が関節していないので、右肘から先は分離していたとみられる。また、頭蓋骨と下顎骨の向きが異なり、頸がはずれかけていたのであろう。さらに、下肢が片方欠失している。

死体は一定期間、放置されたとみられ、部分的に損傷がみられる。全体的には関節しているので、自然腐乱より動物等による損傷が大きいと考えられる。

最後に断片化した人骨3が投げ込まれたような状態で出土した。頸付近に肋骨と頭蓋骨の一部、左

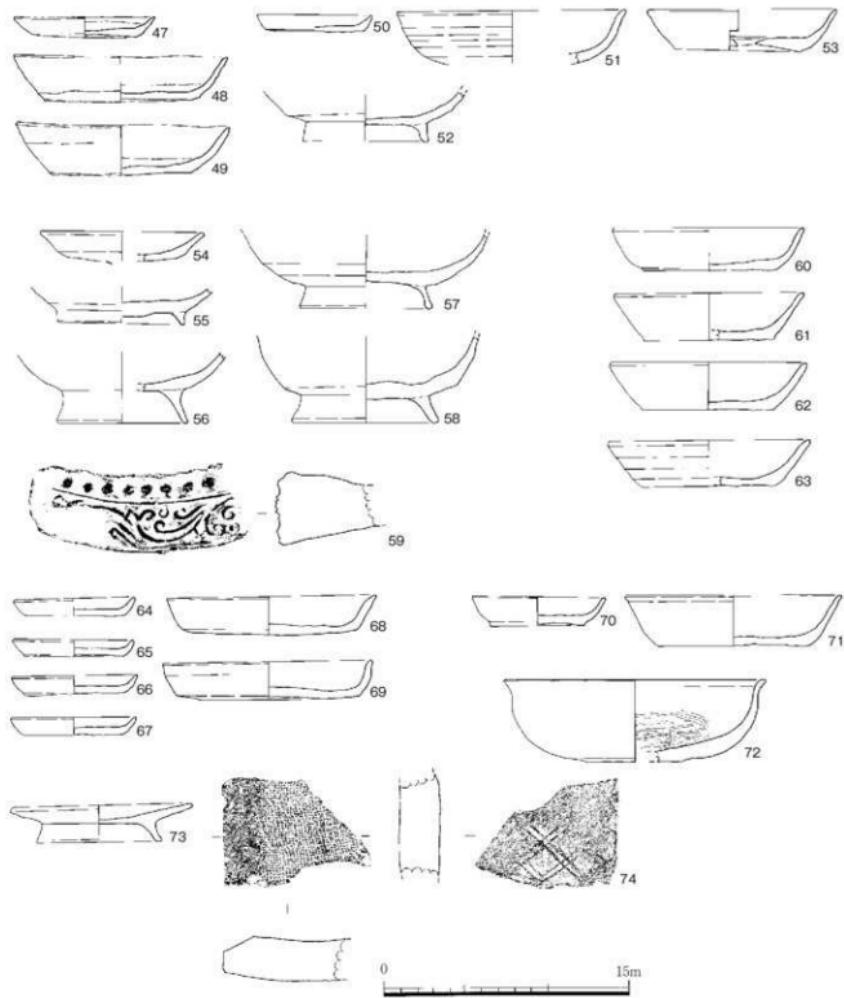


Fig.17 出土遺物実測図4 (1/3)

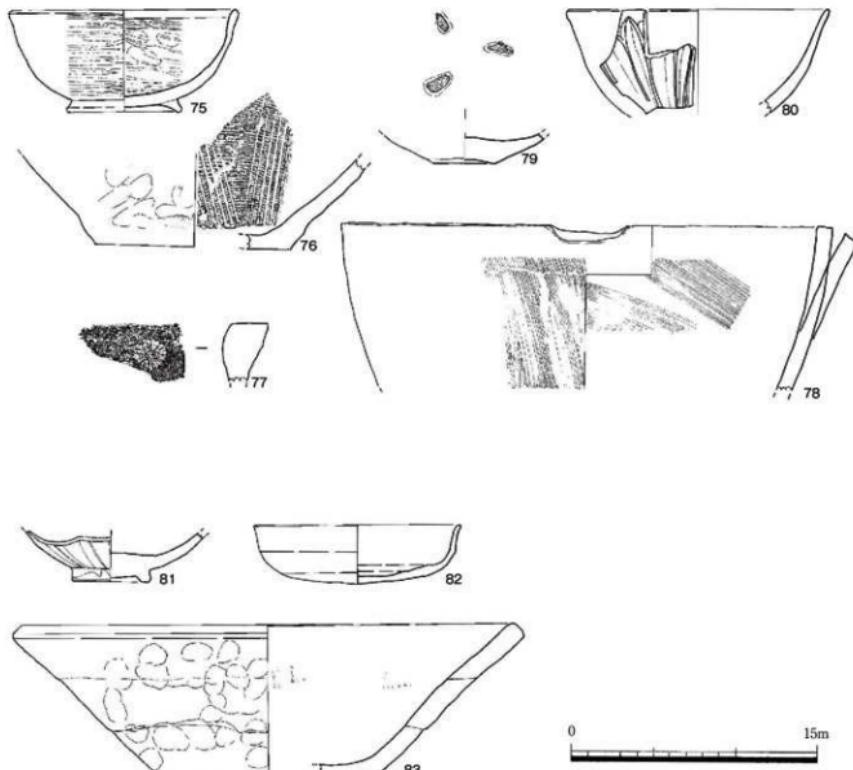


Fig.18 出土遺物実測図5 (1/3)

肘付近に歯、とう骨もしくは尺骨、上腕骨、上腕骨ととう骨、尺骨が関節して出土した。これらは同一人体のものか不明であるが、遺棄されるまえに多くが分離してとみられる。

以上の人骨は成人であるが、性別は不明である。

(2-3) 壁穴住居跡

SC107

1区2面で検出された。SD75とSD86に切られ間に残る。焼土を検出。時期は不明であるが、2区で出土した84、85の弥生終末から古墳初頭の時期の壁穴住居跡が展開している可能性がある。

(3) その他の遺物

31は1区1面の現代土壤SX03から出土した灰釉陶器壺である。外面に灰色の釉がかかる。50~52は2区1面のSX139から出土した。50は黒灰色を呈した土師皿である。底部は糸切り。51、52は同一

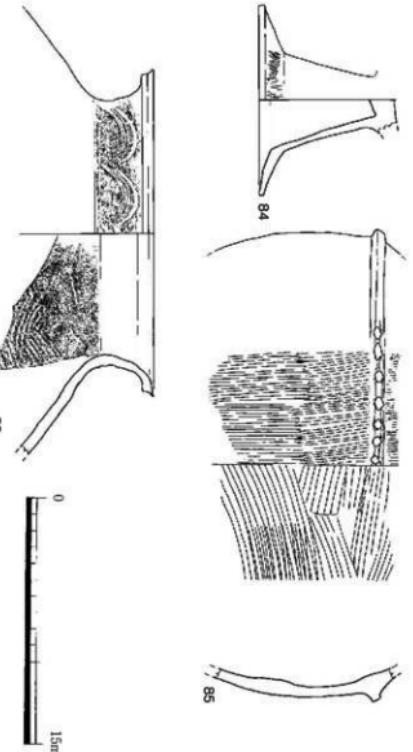


Fig. 19 出土遺物実測図 6 (1/3)

個体の土師器碗である。X 1期前後（11世紀中頃から後半）と思われるが、50の土師皿は時期差があり、降る。54～59は2区2面の検出面（SX145）から出土した。54は土師皿、55～58は土師器碗である。55は灰白色、56は赤褐色を呈し、高台内側から外底にかけては黒色となっている。58の体部は底部近くで屈曲し、古相を呈している。59の平瓦瓦当は大宰府分類の666Aに比定される。X～X 1期（10世紀後半～11世紀後半）か。60～63は2区2面SX149周辺から出土した土師器碗である。淡赤褐色～黄灰色を呈す。口径は12.0cm前後でX 7期（13世紀前半）頃と思われる。64～69は2区1～2面SX139から出土した。64～67の土師皿は口径7.5cm前後、68、69の土師器碗は口径13.0cm前後を測る。X VII～X VIII期（13世紀代）頃か。70、71は2区2面のSP165出土である。70は土師皿、71は土師器碗。いずれも淡黄灰色を呈す。X Ⅸ期（13世紀前半）頃か。72は2区2～3面SP216から出土した土師器碗の高台付皿である。ほぼ完形。74は複線格子文タキの平瓦片である。時期はX 期頃（10世紀後半から11世紀前半）頃か。81は2区2～3面の検出面287から出土した鍋進弁文の青磁碗である。82は2区2～3面検出面325から出土した完形の土師器碗である。X 期頃か。83は2区2面検出面283から出土した土師質の鉢である。内面磨耗が著しく、6本単位の指り目がわずかに残る。84、85は2区2～3面検出面331から出土した弥生終末期から古墳初頭にかけての高台、蓋である。86は2区3面検出面366から出土した須恵器蓋である。

整地層出土遺物

1 面明褐色土出土遺物（87、88）

87は白磁碗である。高台から外底は露胎である。見込みに粘土目跡を残す。氷裂が多く明るい水色に近い発色である。88は土師質の火鉢である。突帯間に巴文のスタンプが付く。

1区1面褐色土（89）

89は青白磁の蓋（梅瓶）である。片彫りとわずかな輪齒がみられる。

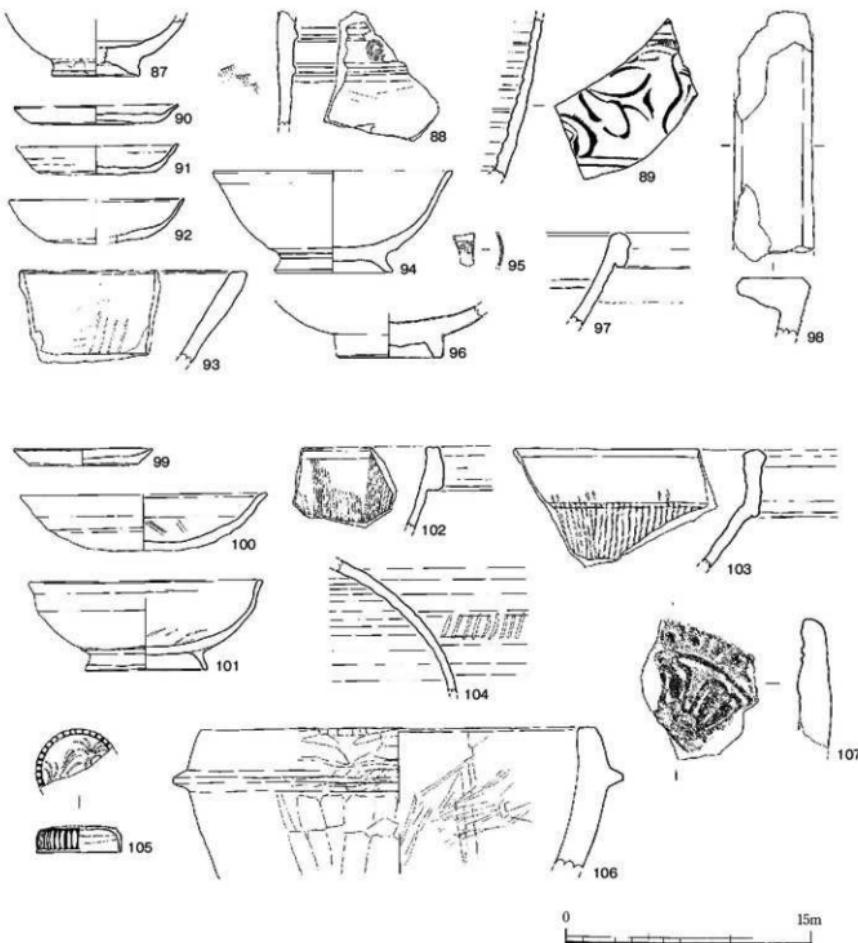


Fig. 20 出土遺物実測図 7 (1/3)

1区2層黒色土(99~107)

99は土師皿、100は土師器壺、101は土師器碗である。100、101はXⅠ期頃とみられる。102、103陶器摺鉢である。102は細い摺目がわずかに間をおいて刻まれている。外面に薄く灰釉薬が掛かる程度で大半は無釉である。103は粗い摺目が全面に施されている。口縁部上端と帶の上部は重ね焼きにより黒変している他は無釉で赤褐色を呈す。104は黄褐釉陶器の壺片である。外面の斜線文の文様帯以下が施釉されている。105は青白磁合子である。内面体部は露胎である。106は口縁部がやや内側に湾

曲する。12世紀代か。107は丸瓦瓦当片である。灰白色を呈し、軟質である。複弁文であるが、劣化し不明瞭となっている。

2区1～2面整地層出土遺物（90～96）

90、91は土師皿、92は土師器坏である。93は土師質の摺鉢である。火熱を受け赤変している。94は土師器碗である。X I期頃か。95は雷文の青花である。96は青磁碗である。疊付から外底は露胎である。

2区1層褐色土（97、98）

97は31と同一個体とみられる。口縁部上端と外面の口縁帶下の露胎部分において黒褐色の釉が施されている。口縁帶から内面にかけて乳白色の釉が施され、2条の平行線が掲釉（鉄絵）で描かれている。口縁部上端は釉が拭き取られている。98は土師質の（火）鉢である。内側に口縁部が突出し、外面体部に連続する三重線の菱形文スタンプを施す。

鉄器

いずれも整地層（包含層）からの出土である。1は刀子、2は鋤先である。

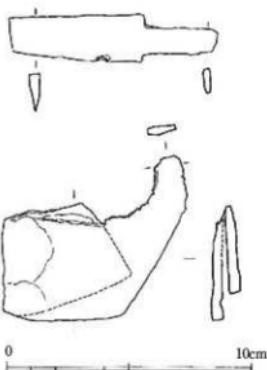


Fig. 21 出土鉄器実測図 1 (1/2)

IV おわりに

1. 灰白色粘土を貼った遺構について

第1面で灰白色粘土が貼られた土壤を検出した。同様の遺構は近接した第70次でも検出された。遺構の特徴として以下の点が挙げられる。

- ① 底面までが浅い
- ② 第1面（中世整地層上面）からの掘りこみ
- ③ 壁面から底面にかけて灰白色粘土を貼る
- ④ 方形プラン
- ⑤ 並列した配置

①、②からは上面からの掘りこみで、上部が削平されていると考えられる。この掘りこんだ層位の上層には、遺構が検出されず、遺物もほとんど含まない明褐色土が堆積していることがある。従って、他の中世遺構に比べ、掘りこむ層位が上部にあり、整地による削平の影響を大きく受けたとみられる。時期は出土遺物がほとんど無いために不明確ではあるが、70次調査の成果も含めて15世紀以降とみられる。現在までのところ近世の遺物は含まない。

③～⑤については全体の形状や規模が明らかではないので、その性格も判然としない。しかし、上部が削平された竪穴の貯蔵施設であった可能性がある。板壁の痕跡は認められなかったが、底面、壁に粘土を貼ることによって、防湿と補強を図ったものであろう。また、粘土によって不透水とした貯水施設の可能性もある。方形プランのほか、第70次調査では溝状に連続したものも検出されている。

配置については1区のSX25とSX63が同規模とみられ、並列し、その間に主軸方向を同じくしてSX07を構築している。また、2区においてもSX147とSX500は同規模の可能性があり、これも並列している。このように規則性がみられ、集中した配置には共同の使用と管理が窺える。

2. SD75について

1区から2区にかけて直線的に延長したSD75を検出した。その特徴として以下の点が挙げられる。

- ① 13世紀初頭頃に埋没
- ② 直線的に延長
- ③ 規模が大きい
- ④ 断面V字状

①については比定した時期より遅る可能性もある。2区では方位を異にした比較的規模の小さい溝を切り、最も新しい。土層から両岸には土堤が築かれていたものとみられ、上層からの構築が観察できる。

②～④については、下部が砂丘砂となって埋没しやすくなるにも拘わらず、断面V字状に深く掘削している。幅は2.5m以上が考えられ、さらに土堤が加わる。既往の調査では延長が検出されていない。詳細は不明であるが東側隣接地の30次SD088の可能性がある。現在までのところ、その性格は不明であるが、周辺には10～12世紀代の瓦当が比較的多く出土していることから、寺院などに関連した施設の可能性もある。

3. 遺物の時期と遺構について

中世末から近世初めまでを含めた時期で最も新しい遺物は1区第1面の明褐色土から出土した88の瓦質火舎である。層位的に上記の灰白色粘土を貼った遺構が近い時期と考えられる。その下層である第1面～第2面の遺物や第2面検出の遺構からは10世紀後半～14世紀初頭までを含む。古くは10世紀代を含む大宰府編年のX期に近い遺物が少量含まれる。その後の11世紀代に比定されるXI期の遺物が多くなり、越州窯系青磁も出土する。さらに、12世紀以降になると貿易陶磁の量も格段と増加する。この時期を示すように出土した土器器皿についても大半が糸切り底である。

ここで、注目されるのは11世紀代から輸入陶器類が増加し、大宰府出土の10～11世紀代の瓦当と同タイプのものが周辺も含めて出土することである。「II 位置と環境」でも記したように大宰府と筥崎宮は密接な関係を保持していたことからこれを反映している可能性がある。また、近くの71次調査では10世紀代の可能性がある梵鐘鋳造遺構も検出されていることから10世紀代の遺構、遺物については筥崎宮や神宮寺との関連からも究明していく必要がある。

中世後半期については、土地の改変が行われ、遺構が掘りこまれるレベルが異なった（上位となつた）ことが考えられる。上部から掘り込まれた柱穴の埋土に灰白色粘土粒が多く含まれていることもその根拠として挙げられる。また、この中世包含層（整地層）には重要な遺物を含む。従って、中世包含層上面からの調査が極めて必要である。



Ph.1 1区第1面全景（東から）



Ph.2 SK07検出（南から）



Ph.3 SK25検出（西から）



Ph.4 1区南壁土層（北から）

図版2



Ph.5 1区第2面完掘状況（東から）



Ph.6 SD75土層（西から）



Ph.7 SD86土層（西から）



Ph.8 2区1面東半部（北から）



Ph.9 2区1面南東部（南から）



Ph.10 2区1面南東部近景（南から）



Ph.11 2区1面SK131遺物出土状況（西から）



Ph.12 SX149人骨検出状況（東から）



Ph.13 2区第2面南半部（西から）



Ph.14 SD113全景（東から）



Ph.15 SD113西壁土層（東から）



Ph.16 SD113東壁土層（西から）

図版6



Ph.17 SK143粘土検出（南から）



Ph.18 SK263検出（東から）



Ph.19 2区2面北半部全景（南西から）



Ph.20 SX108土層（北から）

報 告 書 抄 錄

| ふりがな | はこざき54 | | | | | | |
|---------------|---|------------|------------|----------|----------------------------------|---------------------------|------------|
| 書名 | 箱崎54 | | | | | | |
| 副書名 | 箱崎遺跡第72次調査報告 | | | | | | |
| シリーズ名 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第1344集 | | | | | | |
| 編著者名 | 荒牧宏行 | | | | | | |
| 編集機関 | 福岡市教育委員会 | | | | | | |
| 所在地 | 〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667 | | | | | | |
| 発行年月日 | 2018年3月26日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡名 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 遺跡番号 | 東経 | 発掘期間 | 発掘面 積(m ²) | 発掘原因 |
| 博多遺跡群 第70次 | 福岡県福岡市東区 箱崎1丁目2051番 4、2053番2、2054番 1、2054番12、2054番13、 2054番14 | 40130 | 022639 | 33°37'0" | 130°25'33" ~ 20150522 | 167 | 共同住宅 建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 | | |
| 箱崎遺跡 第70次 | 町屋 | 古代～ 中世 | 大溝、土塁 | 瓦、陶磁器 | 13世紀初頭に断面 V字溝が直線的に 延長していく。 | | |
| 要約 | <p>箱崎遺跡北東部の砂丘列に位置する。現在の地表レベルは標高4.0mであるが、地山の砂丘のレベルは2.9～3.2mを示し、西側へ下降している。</p> <p>調査では2～3面の遺構面を設定した。時期的には11世紀～13世紀を中心となるが、16世紀代とみられる中世末の遺物や遺構も上面の遺構面から検出した。</p> <p>主な遺構として上面で底面に粘土を貼った方形土塁、下面から直線的に東西に走行し幅2.2m、深さ1.2m、断面形が急峻なV字状の大溝が挙げられる。さらに下面からは大溝と方向を異にする溝が検出され町筋が変わったものとみられる。また、12～13世紀代の人骨3体が重なり検出され、片付けられたものとみられる。13世紀代とみられる大溝は防御性の高い区画溝と考えられ、周辺の調査においても瓦の出土が比較的多くみられることや梵鐘鋳造遺構が発見されていることから寺院や昌靖宮と関連している可能性がある。中世末から近世の遺構は現代までに大きく削平され底面部分のみ残る。</p> | | | | | | |

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1344集

箱崎54

—箱崎遺跡第72次調査報告—

2018年（平成30年）3月26日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印 刷 魚住印刷
福岡市博多区大博町8-20

